

平成13年度 リーダーズセミナー in 愛媛

新しい中四国を担う
リーダーを目指して



リーゼミ選手権優勝チーム
賞品のジャケットを着て

中四国学生剣道連盟

期間：平成14年3月13～14日

主管：聖カタリナ女子大学

《講演》

剣道に求めるもの

中四国学生剣道連盟 副会長 湯村正仁

剣道を、自分の人生の中で、どのように位置づけるか。

みなさんが剣道を生涯剣道として取り組むためにこのようなことをはっきりしておく必要があります。今日の話が少しでも参考になれば幸いです。私の場合は、「人間修養の道として、自分が選んだ道」としてとらえています。もちろん、私も学生時代に生涯剣道などというたいそうな目標を持っていたわけではありません。あるきっかけで剣道のすばらしさに気づき、やめられなくなってしまったのです。

私の忘れられない体験

高校に入学して始めた剣道を、今日まで続ける機会となった出来事は、大学2年のことです。夏の稽古で、暑いときです。相手が引き面を打つのに対し、一歩前へ踏み込んで、胴に抜いていました。無意識ではなく、明らかな意識の下で打ったものです。振り返ってみるのに、私には「相手がスローモーションのようにゆっくりした動作であった」と思われたのです。なぜあのような心境になったのであろうか？ なぜあんなことができたのであろうか？ とにかく、普通でない恍惚感を伴い、すばらしい体験でした。「もう一度体験したい」との思いは、つのるばかりで、ついには、医学部をやめて、剣道の専門学校に行こうとしました。この企ては、指導教官の説得により中止しましたが、忘れたことはありません。卒業して、医師としての仕事に従事し、日常生活の中に埋没するうちに、心の求めるものは次第に高くなってきました。

そこで、一大決心をして研究生活に決別し、郷里の鳥取に帰ることにしました。鳥取に帰った後、少年剣道の指導を通して、剣道の基本を見直すとともに、大田、山根、山本節士に向かっての打ち込み、掛り稽古の毎日で、その結果、7段に合格しました。その頃から、心の問題は「稽古だけでは解決しない」と考え、本を読み、我流ながら座禅を組み、鏡に向かって刀を構え、刃筋を通して刀を振る日課を課しました。その結果、求めていた心境を時々体験できるようになったのです。特に、試合、昇段審査などの緊張した場面で体験できるようになったのです。

三昧の境地 ASC

このようにすべてに優って感じられるすばらしい心境を、ASCといいます。



ASCとは、altered state of consciousness の頭文字をとったもので、日本語では変性意識状態、三昧の境地といいますが、心身医学用語です。

1. 意識状態は非常に高いレベルにありながら、
2. 脳波では脳が休息した状態にあり、
3. 交感神経と副交感神経のバランスがとれていること

が証明されています。

どうすればASCに入れるか？方法として例えば座禅、読経、念仏踊りもあります。私たちは剣道を通して入りたい。猛稽古、寒稽古、暑中稽古などもそのひとつでしょう。それでは意識的に入る方法がないか？このようなASCの状態を理解し、再現するためにどうしたらよいかを考えてみましょう。

そこで、1.「意識状態を高める」に五感をとぎすまし、皮膚を刺激し、筋肉を動かして体を使うことは意識状態を高めることにほかなりません。五感を使いすぎて、疲弊させることは考えものです。目に入るもの、耳に聞こえるものすべてを意識として取り入れていたのでは、疲れてしまいます。必要なもののみを拾い出す訓練は必要です。むしろ、普段はポーとしているほうがよいのです。「観の目付け、見の目付け」というのはこのあたりに要点がありそうです。

2.「脳の休息状態を求める」すなわち脳波が消えた状態とするには、新皮質の知恵の座の働きを抑えることです。いわば、黒板を真っ白にして、なんでもはっきりと書き込める状態にすることです。「平常心」とか「無心」といわれる所以です。もの考えることは、脳の中のいろいろな分野からの情報が神経接合を介して行きかっている状態です。脳波では、細かな波が乱立しています。大脳半球では左右で役割が違ってきます。通常ものを計算的に考える

ために使われる左脳に対し、右波は感性を司っています。剣道で「四戒」いわれる感情は右脳にあり、感情が入り込むと、脳の左右で情報のやり取りが活発に行われていることとなります。左右の脳の間で脳梁を通して神経の連絡がやり取りされるとともに複雑になります。目で見て脳で考え、その命令が筋肉まで達して運動として表現されるには実に大変な時間が必要です。「無心の状態」で単一の連絡経路で反応するときとは大変違った反応時間となることは容易に想像できます。ASCが「意識の喪失を伴わない意識の空白状態」といわれるのはこの故です。

姿勢で脳の働きをよくする

さらに、ASCに入るための条件を追求してみましよう。

まず、姿勢の効用。筋肉には「筋紡錘」といわれる器官があり視床下部と直結しています。姿勢を保つことは常に一定のレベルに意識状態を保つように働くことを示唆しています。視線を安定させることは、目から入る刺激が安定し、反応経路を少なくし、反応をたやすくすることに有効です。視覚のみならず、ほかの感覚でも同様です。背筋をピンと張った姿勢は、腹式呼吸を可能にします。脳が働く時には非常に多くのエネルギーを使用します。運動時に使用されるエネルギーの実に60%は脳が使っているといわれています。多くのエネルギーを生み出すためには、当然多くの酸素が必要であり、また排出物も多いはずですが、これらの物質の運搬は血液によるのですが、姿勢を保つことで血液の循環をよくし、結果として脳の働きをよくすることに寄与しています。脳は脳脊髄液という水に浮かんでいます。脳の活動により発生した熱は、脳脊髄液というラジエーターによって温度が一定に保たれます。脳脊髄液の循環もよくする必要があるわけです。

丹田呼吸で神経中枢を刺激

次に呼吸の問題を考えて見ましよう。

剣道で腹式呼吸推奨されます。これは横隔膜を上下させる呼吸法で、横隔膜の背中側の付け根にある「太陽神経叢」を刺激いたします。これは交感神経と副交感神経が集まったところで、内臓のコントロールの中心となるものです。平常でもこの呼吸法により、気持を安定させ、血圧を下げ、脈拍を少なくするなど、自律神経が安定したことが認められます。医学的にも自律神経失調症などの治療にも使われます。この腹式呼吸を永く息を吐き続けてみます。そうすると、おなかの下の方、すなわち「丹田」に力が入ってきます。

ここは、仙骨の前で、やはり交感神経と副交感神経が集まったところですが、腹式呼吸、特に長呼吸丹田呼吸では、この二つの神経中枢を刺激し、体の内部環境を整える役割をいたします。交感神経と副交感神経のバランスがとれるだけでなく、ホルモン環境が整えられ、免疫機能が改善されます。

また、これは私の私見ですが、息を吐き続けて、血中の酸素濃度がさがります。この影響は、一番酸素をたくさん使用する大脳皮質の働きを抑えるのではないかと考えています。剣道はこのような呼吸の状態で行います。このための訓練として、切り返しを一息でやるとか、剣道形は一本ずつを一息でやる、さらに懸稽古・打込稽古が行われます。昔から言われる、猛稽古の効果もこの辺りにあるのではないのでしょうか。

私は試合前に、できるだけ長く息を吐き続け、頭の中を真っ白にしてしまうことを実行しています。

以上の姿勢、呼吸の問題は「調身」「調息」として大事に言われています。

火事場の馬鹿力

加えて、次のようなことも考えて見ましよう。

皮膚は発生的には、脳と同じです。皮膚を目覚





めさせることは脳の目覚めと通じています。朝、皮膚摩擦により、はっきりとした目覚めの状態で、一日を過ごすことです。

食物は脳のエネルギー源として大切です。また、睡眠は脳の休息に大切なものです。調息、調身により心が整えられます。その要諦は、脳の働きを如何に抑えるかということで、本来自分が持っている能力を100%発揮させるためには、邪魔になる脳の働きを抑えることです。火事場の馬鹿力はこうしてつくられます。筋肉の力を調べると、自分の意思で出した力は電気刺激により出した力の70%しか発揮できないそうです。すなわち、30%は意識しない作用により抑えられている事になります。また、感覚器官からインプットされ筋肉により発揮される体の動きの経路を単純化することにより、より早く反応できるわけです。

このような理由によりASCにおいて、信じられないようなパフォーマンスをみることが出来ます。ASCを知ることにより、物の価値観が変わってきます。心のあり方の大切さが実感され、自分の体も自然の中の一部であり、大きな宇宙の一部であることに気づきます。世俗の中に生きている私(世間の子)は、本来生かされている私(自然の子)であり、ほかの動物、植物にしる、すべての生き物は「命」としての宇宙現象の表現であることに気づきます。

アメリカの青年の仏道修行

4~5年前のことになります。ちょうど今の時期、峠に雪が残る頃であります。妻と二人で京都に住む息子のところへ行くため、国道9号線を車で走っていました。兵庫県境のトンネルを越えたところで、一人のアメリカ人のヒッチハイカーを拾いました。何か感じるものがあり、車を急停車させたのです。まだ年も若く、優に190センチを超える身長で、荷物とともに後の席に乗ると座席が狭く感じられました。頭はきれいにそり上げられています。京都までの約4時間、片言語と日本語での会話の結果は以下のとおりです。年齢は19歳、16歳で大学に入学し、

すでに大学院の論文も仕上げた。すなわち、アメリカ超ド級のエリートです。専門は、理論物理学。理論を突き詰めていくと「無」世界となってしまったとのことで、これはすでに東洋思想、中でも仏教の思想にすべて書かれていた。それを知った彼は日本にやってきて、3ヶ月の山陰の冬の山の中の禅寺で修業し、それを終わって、今降りてきたところでした。私は感動しました。彼の勇気と、行動力に感心しました。

京都への途中、ドライブインで彼と昼食をとりました。費用はもちろん私持ちです。「何でもいただきます」との言葉に私たちと同じ和定食としました。驚いたことに海老の頭から尻尾まで、魚の骨まできれいに食べてしまいました。「山寺での一汗一菜の生活から抜け出たから何を食べてもおいしいのか」と思いきや、さにあらず。彼は、「命をいただいています」と表現しました。将に、自分が宇宙の一部であることを認識した上での言葉です。経験だけの修行でなく、本物の修行であると感じました。このような認識に立つと命へのこだわりがなくなります。

本来の我

先日、ある剣道の先生と話をしていました。猛稽古によって「死んでもいい」という気になれば、何でもできると。剣道ではそのような方法から入って、死の恐怖から脱却し、「本来の我」への気づきに至る方法があり、立ちきり稽古・試合がその方法として行われてきました。

自己へのとらわれがなくなり、死への恐怖から離れると、すなわち本来の自己に気がつく、物がよく見えてきます。相手の考えている意図がよくわかり、先が読めるようになります。ものの判断に偏りがなく、公平に見ることが出来ます。このような人の姿が世の中のゆがみを正し、世の中を明るくすることに役立つと考えます。「剣道修行上の心構え」の最後に『もって国家社会を愛し、広く人類の平和繁栄に寄与せんとするものである』とあります。

本当にここまで達した人の剣道はどのようなものか?今の話でお分かりでしょう。相気であり、相打ち、さらには相抜けてあります。気で圧されて何もできない相手というものはあるものです。私の八段受験前のこと、仕上げは、堀口清範士九段にいただきました。

ある時、「面は打てるようになった。さあ、それでは一本、本気でやろう」との言葉の下で稽古に入りました。何度やっても、竹刀をふりあげることもできず、ただ、壁際まで下がるだけでした。そのうち、息もできず、意識がとしてきてその稽古は終わったのです。今でも思い起こしては理想の姿として心に抱

いています。ところで、そのような「気」というものは本当にあるのでしょうか。相手の考えがすべてわかるための現象なのでしょう。「気」についてたくさんの本が出版されています。「気」について知りたくて、いろいろ読み漁っていますが、現在のところ、「気とは感じ取ることはできるが、現在の知識では知ることができないもの」のようです。東洋医学では、気を大事にします。気が病むのが病気であり、病気を治すには気の流れをよくすること、と考えています。土地にしても、気の強弱があり、その土地の磁場と関係があるという話があります。西野流呼吸法で有名な西野氏は気を発することにより相手を飛ばすといいます。合気道の植芝盛平は力士が体を揺さぶってもびくともしなかったというような話があります。何かはあるが、何かわからない。



筋力トレーニングによる修正

最後に、心の問題というソフトに対し、ハードである体の機能について話しておきます。運動能力を高めるためには運動の基本能力である心肺機能を高め、筋力を高め、体の柔軟性を高めることは言うまでもありません。剣道人の基礎体力はほかのスポーツと比較しても、非常にバランスよく高い能力を持っています。しかし、剣道の特性から、剣道だけやっていたのでは体に歪ができます。中でも、踏み込み足としての右足、蹴り足としての左足の違いによる骨盤のゆがみは体全体に影響が大きい。ストレッチング、筋力トレーニングにより修正する必要があります。剣道の基本動作の中には故障をおこさないための知恵がたくさん含まれています。基本をしっかり守ってください。

おわりに

本日は少々難しい話になったかもしれませんが。本当の自分の姿に気づく能力は皆さん全員が持っています。勝った、負けたも剣道ですが、その底に流れる大きな目的があることを知り、皆さんの剣道の指針としていただきたいと思います。幸いなことに、剣道では過去のたくさんの先達が、それこそ命がけて築き上げた指導書があります。

中四国の学生剣道部のリーダーの皆さんがしっかりとした理念を持って、それぞれの剣道部をリードしていくことが部員に対して大きな影響を与えることを銘記してください。今日の話が少しでも参考になれば幸いです。



湯村正仁先生のプロフィール

昭和16年 松江市生まれ
鳥取東高校・鳥取大学医学部卒業
現在、神戸赤十字病院 副院長
医学博士 剣道範士八段

大城戸功先輩実技指導

記録文責 元山正樹

はじめに

剣道において、手・足共に丈夫でなければならない。手だけ直そうとすれば、今度は足がおろそかになってしまう。ここを直せ、あそこを直せ、と集中的に直せない。これが非常に難しい。そこを神経をめぐらせていただいて一緒に直していけるようにしていただきたい。

上下素振り

上下素振りというのは確認作業。自分が竹刀を体の真ん中で振れているのかいないのかを確認していただきたい。小・中学生ですと、体の真ん中で振るということを大切にする意味で背中に当てて振りますが、皆様方大学生ですと背中に当ててするのは意味がないと思います。

まず振りかぶりですが、日本剣道型を見ても刀の振りかぶりは45度です。右手の握りの位置が鏝と離れているような柄をあまり持つというのは良くないことだと思います。鏝元一杯に持ってください。合わないのでしたら柄を短くしてください。



今、正しい構えができていると思いますが、そのまま構えを崩さないで肩を使って上段の構えをとってください。それで肘の間から相手の顔が見えれば良いです。

次に振り下ろしですが、振り下ろして打った瞬間に竹刀の先にブルツというような震えがくるわけです。この振動がないと素振りにならないわけです。これが面を打つときの冴えにつながります。そこに注意してやっていきます。振りかぶって下ろしたときに地面の方向に向けるか、相手の方向に向けるか注意してください。

(実技)

打つ瞬間に右手を滑らせない。持っている位置を動かさないで振る。

(実技)

これで手は出来ました。今度は足です。前後の正面を打つわけですが、大事なのは右足です。当然踵は上がっているのですが、後ろに滑らせる時に(踵が地面について足先が上を向いている)つま先がこのように上を向いてしまうと体重移動がおきてしまいますから、つま先を上げない。(学生に前後のすり足を指示)

今度は手もつけます。

(実技)

みなさん大学生ですから、この振り上げから振り下ろしを1拍子でやっていただきたい。そのためには振り上げを早くする。

(実技)

跳躍素振り

足の使い方の順番(右足→左足の順)を守っていただきたい。悪い例として右足が前に出る、両足同時に着地する、左足がついてこないから足幅が開く。ですから打った時にタタンツと音がする。そうすることにより面を打つ時の連続足(実際に面を連続3回打つ)につながります。必ず左足を引きつけて下さい。

(実技)

左足を引きつける時に左足のつま先が左を向いている人、しっかり左足のつま先を前に向けるように。そしてみなさん左足が摺るような感じになっていますので、ここのあしができるようになれば連続足につながります。手は先ほどの上下素振りのことを思い出してやってみましょう。

(実技)

これを頭の中で考えながら行っていって、できるまでは常に頭の中で考えて実行してください。

(学生、面を着ける)

面打ち

一足一刀の間合いから摺り足で打つ(面を打ってその場で止まる)

(実技)

摺り足というのは足腰を使う。打った瞬間に姿勢をつくらなければならない。左足の引きつけが出来てなければ姿勢がつかれない。ですからまずは摺り足で面を打ち、左足の引きつけを意識します。そして姿勢が崩れないようにします。ここで手が滑らないように注意します。

(実技)

先ほど素振りで行ったように1拍子で打ちます。そして今度は足を摺りません。左足を全く動かさずに打ちます。このような面打ちができますと出頭の面が打てるようになります。

(実技)

左足の引きつけが悪いと体勢が前倒しになってしまいます。このようにならないために摺り足で足の運び、腰の運び等、自分の体勢を確認します。後はそれを早くするだけ。一挙動の足です。このように剣道は全てつながっています。これを我々が理解しないとバラバラになってしまいます。試合は試合、稽古は稽古というようになってしまいます。剣道は全てがつながっているということを理解してください。

次に遠間からの面打ちですが、遠間から一步入って打ちますが、一步入るときに竹刀を振りかぶってしまう人は、その時に左足が右足よりも前に出てしまいます。

遠間から攻める、一足一刀の間合いに入る、打つ、残心。入る時にただ単に入るのではなく攻めの気持ちを持って入る。

(実技)

今度は小さく打ちます。そして入る時に工夫してください。表から、裏から、下から。ここで気をつけてほしいのは入ってから攻めるのではなくて、入りながら攻める。送り足の時に攻める。攻めの工夫で竹刀を使って下さい。私おうと下げようとみなさんの自由です。

(実技)

この攻めは面打ちも籠手打ちも同様です。攻めて入る、籠手があく、籠手。攻めて入る、胴があく、胴。攻めて入ると相手のどこかがあきますからそこを打

ちます。

2番目のポイントとして左足の引きつけ。左足が速く送れば次の技が速く出るわけですから、左足を早く引きつける。これがこのように遅くなると(体が前倒しになった状態)このようになってしまいます。左足で相手を膝で蹴り上げる気持ちで引きつけるとスムーズにいきます。そうなると2段打ちがうまくいきます。今度は攻めて籠手・面の2段打ちをやってください。

小手・面

(実技)

受け方も大事です。(竹刀を左に向けてあける)このようにあけることはありません。試合でもこのようにあける人はいません。受ける人は竹刀の剣線を上に向けて、打つ人はそのあいたスペースをうつ練習をする。そして籠手を打たれたらどうするか。まず竹刀を右に向けます。そこを打つ人は表から面を打つ。大学生ともなれば打たせる人も、より実践に近い感じで打たせるようにしてください。

(実技)

ここまで行っていたのが仕掛け技、自分から仕掛けていく技。その中に払いがあり、巻きがあります。面返し胴

そこで今度は返し技をやります。面返し胴、これは面の受け方を学ぶ上で重要。打つ方は摺り足で大きく面を打ちます。受ける方は受けたところから胴が打てること。うまくいかない人は受けてから竹刀を一度後ろに引っ張ったり余計な動作を入れているからです。受けた場所から胴を打つこと。

(実技)



打つ間合いに関してはここだ、という間合いはない。小さい人もいれば大きい人もいるし、手が長かったり色々いるから自分で見つけること。必ずこれだ、という間合いがあります。そこから摺り足で打ちます。面すり上げ面も一緒、(手本を見せる)日本剣道型と同じ。(籠手すり上げ面の手本を見せる)摺り足の練習をして下さい。そして型を取り入れると非常に効果があります。

合わせ技

(打たせる方は一步前が出るだけ) 出だしで左足を動かさずに、相手が出てきたところを打つ。相手の動きに合わせて打つ。

(実技)

何人かが打った後、横に抜けている。そうではなくて打った後、相手に「どけ」というくらいの気持ちでまっすぐ打っていかなくてはいけない。よけて打つのはよっぽど遅れたときです。そして合わせる方は「打つぞ」という色を見せない。

(実技)

今度は打たれる方も面を狙っていきます。打たせる方は自分の好きなタイミングで面を打って行ってください。

(実技)

出頭の技は相手をおしているときに使うこと。攻められているのに狙ったら負けです。相手をおしている中で動きをとらえて打つと決まる確立が非常に高いです。技を使うところを考えてください。

引き技

引き技には右足で下がる方法と左足を盗んで(上体を変えずに左足を後ろに引く) 打つ方法と2つあります。どちらを使うかはみなさんのやりやすい方でやってください。宮崎兄弟の打ち方は右足で下がる方法、石田利也は左足を盗んで打つ方法です。宮崎は背筋が強いからこちらで打っているようです。

(実技)

自分がいままで打ってきた技にプラスこういう打ちがあるということを認識してください。

切り返し

打った後、振りかぶったときに元に戻す。それを意識してください。肩で上げると正しい打ちができます。それでは違和感があるという人は左手を天井へという意識で振りかぶって打ってください。竹刀で受けられると竹刀を打つ人がいます。そうではなくて面を打つ気で打ってください。

受ける人は、竹刀の両面を使って切り落とす感じで受ける。竹刀の両面と手の締めを使って受けることができると、すり上げ面などがうまくできるようになります。つまり切り返しを受けるのも練習で

す。

打つほうは面を前に4歩、後ろに5歩打ちます。そして9歩を1呼吸で行ってください。

以上です。バッテリー切れのためここまででした。



大城戸功先生プロフィール

昭和30年 松山市生まれ
新田高校・松山商科大学(現松山大学) 卒業
昭和49・50・52年 中四国学生選手権優勝
昭和52年 全日本学生選手権優勝
昭和63年 世界選手権優勝

不完全であることの価値とその美しさ

—リーダーゼミナールを通して感じたこと—

聖カタリナ女子大学 矢野宏光

平成14年度中四国学生剣道リーダーゼミナールが愛媛県・伊予市を会場として開催され、怪我人もなく無事終了したことは本当にうれしいことである。これも偏に中四国学連の皆さん、講師の先生方、そして主管として運営に携わってくれた剣道部員、OBの先輩方のお陰であり、関係の皆さんには心から敬意を表したい。

私が今回、このリーダーゼミナールを通して特に印象深く感じ、考えを巡らしたのは、学生それぞれの持つ『眼』についてであった。みんな様々な眼をしていた。その中でも特に、今そのことに集中して心から何かを得ようとしている人の眼には、美しさと強さを感じた。リーダーゼミナール期間中、講義や実技を行う中で、受講生はそれぞれに講師の先生の一言一言、一挙手一投足に熱い視線をおくっていた。それは、講師ができることと自分ができることを比較をしつつ、自己の現在の出来高を押し量っているようにも見受けられた。ある者は「うん、うん」とうなずいたり、またある者は「へー、そうなんだ」、「何で俺はうまくいかないのか」とつぶやいたりしていた。私はこの光景を眺めながらこの時、リーダーゼミナールを開催している意義と価値を確認できたように思う。つまり、この「気づき」と「問題意識」を持った時点で、それは新たな『かたち』として具体的な目標へと変容したと言えよう。むろん、ひとつの課題に対して器用にこなす者、ある程度の時間を費やす者、人はそれぞれである。しかし、やろうとすること自体は、誰にでも平等に与えられている。重要なことは「できたか」「できないか」ではなく、「やろう」としているか「していないのか」ということにあると私は考えている。さらに、やるべきことに早く気づくことは、それだけ大きなチャンスを手に入れることにつながるとも言えよう。

さて、私がかつて日光東照宮を訪れた時のことである。私は広い境内を眺めながらあることに気が付いた。それは、きれいに整然と並んだ寺院の屋根の瓦が、1枚だけ抜け落ちていて足りないのである。それは何故かという私の間に住職の口から出た返答は、「完璧なものとは限らない、不完全なことがあるからこそ人間はそれを求めて生きて行ける」であった。

きっと我々は、完璧でないからこそ努力を続け、それによりその先には新たな可能性が広がるのであ

ろう。少なくとも、おわりがみえたらそこには空虚なものしか存在しない気がする。たとえば、ジグソーパズルの最後の1ピースを入れた時、達成感と共に心の奥底に何となくつまらなさを感じるそれによく似ている。剣道も人生もそんなもののような気がする。おわりというものがないからこそ必死に努力をし稽古を続けるのであろう。少なくとも私の場合はそんな気がする。もっと明確に言えば、『完璧さ』を求めるといよりは、少しでも『まし』になりたいと言った方がよくあてはまる(笑)。

とにかく今回、学生の真剣な眼には美しさを感じた。それは換言すれば、不完全であるが故の価値と美しさであり、求める者が持つ得る大きな可能性とも言えよう。そして、その不完全さがその人の魅力になり、失敗は経験となり、同じ失敗を繰り返さない意識が新たな成功を生むことを忘れてはならない。自分だけの小さな枠の中で完璧さを規定することは、自己の可能性自体を抑制してしまうことに他ならない。私自身も今みえる完全さを求めすぎるあまり、不完全さの持つ価値や美しさを忘れてしまわぬよう、ときに足を止め自己を振り返る必要性を感じている。

学生の皆さんには、この人生を構築する過程で強い影響力を持つ学生時代に、是非たくさんの人に出会い、たくさんの人と剣を交え、剣道を通して心と身体をつなかりを学びながら、今は目前に姿を現さない何かを求めることをやめないで欲しいと願っている。すなわち、それは決して物事をきれいにまとめ上げようとするのではなく、いつも未知のものに向かって挑戦していくことをやめないということである。

今後、このいい『眼』をした学生達が胸を張って、自分の力の限りを尽くして競い合う姿を私は心から楽しみにしている。

平成14年リーダーゼミナールを終えて

中四国学生剣道連盟 幹事長 元山正樹

去る3月13日(水)～14日(木)、愛媛厚生年金休暇センターにおいて、「平成13年度中四国学生剣道リーダーゼミナール」を、愛媛県OB会の先輩方のご指導の下、中四国各大学の剣道部のリーダー85名の参加で開催いたしました。

1日目、13時半に着替えて体育館に集合し、先輩方、連盟員の紹介と挨拶で平成14年リーダーゼミナールが始まりました。そのまますぐに大城戸先輩の実技指導に移りました。まず大城戸先輩の基本打ち等の指導約1時間、その後多くの先輩方に基に立っていただき地稽古を約1時間行いました。自分は所用のため実技指導を拝見することはできなかったのですが矢野先輩から様子をお聞きしましたところ、学生は大城戸先輩の一言一言に真剣に耳を傾けていたとのことでした。

着替え、入浴等を済ませた後に夕食を兼ねた懇親会を行いました。たくさんの先輩方にもご参加いただき盛大な会になりました。先輩方にお話をお聞きしたり、リーダー同士、大学は違えども同じ剣道をするものとして話に花が咲き、お互いの親睦が深められたと思っております。次の日の試合の抽選を行った後、各自解散となりました。

2日目、午前中に湯村先生の講話をお聞きしました。「剣道にもとめるもの」という題目のお話で、医

学的な立場から剣道を話され、自分たちが普段の稽古からでは決して学ぶことのできない貴重なお話をしていただきました。

その後体育館に移動し、3人混成チームによるトーナメント制の試合を行いました。代表戦も多く、各試合場で熱戦が繰り広げられ、その中で思い切りの良さが目立った浅野成彦(松山大)、足立光太郎(愛媛大)、藤富絢子(聖カ女大)の3選手のチームが優勝いたしました。最後の閉会式で、「Challenge Cup」についての話し合いを行い、終了いたしました。

この行事を振り返りまして、目的であるリーダーとしての質を高める、親睦を深めるということは先輩方のご指導と、学生の協力により達成でき有意義なものとなったと感じております。今回は島根大学の愛媛県出身の学生さんも宿泊なしの実技指導、試合のみの参加という形でされました。このように宿泊されなくとも参加できるという体制を作っていく、より良い方向にしていければと思っております。

最後になりましたが、このリーダーゼミナールを行うにあたり、ご指導、ご尽力下さいました諸先輩方、聖カタリナ女子大学を始めとする現地学生役員、学生連盟役員並びに参加されました学生の皆様のご協力に対し、心より感謝の意を表し、感想とさせていただきます。

